
子連れステュワードの縁由

ことわりめぐむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子連れステュワードの縁由

【Nコード】

N3851W

【作者名】

ことわりめぐむ

【あらすじ】

事故で母を、病気で父を失い、生活環境まで変わらざるをえなかった事から困ってるだろうと、王子に思い込まれたローレンは、本人の意思は尊重されずに屋敷の執事として雇用される。華やかでない業務を大した問題もなくこなすそんなある日、夜間見回りの際に幼い少女を見つけ、保護者になる羽目に。なぜ彼女はそこにいたのか、そして命を狙われるのか…。

そんな事よりも、今回は展開上ファンタジー要素がちゃんと書けるのか。ジャンルが怪しいお話です。『北のまちに降る雪』の続編

となりますが、先の内容を知らなくても問題は無いです。

1（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体・事件とは一切関係ありません。

作中にメインで出てくる国名と人物は全く架空のものであり、実在はしていません。作品の世界観上、一部実在する国や文化を引用していますが、話の内容は完全なフィクションです。

因みに「北のまちに降る雪」の数年後の設定となっておりますが、前作品を読まなくても問題なく読んで頂けると思います。

庭の片隅では、とても小さな女の子が座り込んでいた。

賊や敵国の間者かとビクビクしながら向かってきたため、口元に笑みが浮かぶ。男がそんな弱気でどうするのだと屋敷の主には馬鹿にされるかも知れないが、仕方がない、彼には戦うすべがないのだから。

幼女の年齢の違いはローレンにはよく分からなかったが、おそらく五歳から七歳程度と推定する。彼女は、とても長い金色の髪で隠れてはいたが、衣服を何も身に着けていなかった。

幼いのだから恥ずかしいとは思っていないかもしれないが、歳はかなり離れているとはいえ、ローレンとダヴィード、二人の男の目前に全裸のままでは彼女が可哀そうだと考え、上着を彼女にかける彼のフロックコートでは丈が長すぎるため、上着のせいで歩行困難になるだろうと考たローレンは彼女を抱き上げた。

その間、少女は抵抗もせず、何も語らずこちらを見つめていた。

「どうした、僕の顔に何かついてるか」

ローレンの顔をずっと見つめていた彼女の視線があまり嬉しくなくて尋ねると、かわいらしく小首をかしげる。

「もしかして、ぼっちゃんの隠し子だったりして、『パパ』とか思ってるんじゃないの」

冷かすように舌を出してダヴィードが言つと、彼女は気がついたかのように「パパア」と言って抱きついてきた。

「な　なんでだ!!」

「ぱぱあ?」

言葉にはしていたが、予想に反した言葉に、ダヴィードが驚きの声を漏らす。

「違う、違う。断じて違う」

そんな彼の視線に否定をするが、何の説得力も無い。無邪気な子

供が「パパ」と言つて抱きついてゐるのだ。どこのだれが見ても、若い父親と娘として見えるのだろう。

「パパア。この娘どうしますの？」

「だから、違つて 髪の色も眼の色も全然違つたろう」

「いまだき、父親に似ない娘なんて、山ほどいるさ」

異民族同士姻族関係を結んでも咎められなくなった今の世の中、父親の因子よりも母親の因子が強ければ父と子が全く似ていないケースも珍しくない。

「大体、こんな大きな子供を作ろうと思つたら」

「分かつてるつて、お子様に子供は作れないない」

必死で親子でない事を証明しようと論説するローレンの言葉をさえぎるように、ダヴィードが軽く言葉を返すと二人は屋敷への歩みを速めた。

できるだけ人目につかないようにこそそと屋敷の女主人の部屋に向かう。目的は女主人ではなくて、その侍女のヴェーラである。

「ぱぱあ？」

幼子の発言を確認して、繰り返した彼女の第一声は、予想を裏切らず、想像してた通りの反応に顔をしかめたローレンだったが、説明するのだけは省略しない。

「先ほど庭をダヴィードと散歩していたら、この子が居たんだ。なぜか僕を父親と勘違いしてる」

「はあ」

あきれたようにヴェーラは言葉をもらす。その反応も予測済みだし、いちいち反応するつもりはないので、自分の用件を伝える。

「とりあえず、こんなカツコじゃ可哀そうだから、洋服を用意してもらえないだろうか」

「えつやダ。この裸じゃない。なんかしたの」

「知らん」

コートを脱がそうとして、手を止めたヴェーラが怒気の籠った声でこちらを見るが、正直な話「何も知らない」のだから正直にそう

答えた。

「ぱぱーあ」

彼女たちが部屋の中に入ってしばらく待つと、洋服を着せられた幼女とヴェーラが出てきた。白を基調とした赤い小花模様のドレスに身を包んだ姿が愛らしい。長い金色の髪が走るたび流れるように揺れてベールの要に広がるのが、よくドレスに合っていた。

髪はほんの少し湿り気を帯びて、頬は少し赤みがさしている事から、湯を使って汚れを落としたのだらうと推測する。顔色が良いのも可愛らしさを際立たせていたに違いない。

「ヴェーラ。君はかなりセンスが良いんだな」

パパと言つて抱きしめられている事実よりも、短時間で愛らしいレディに仕上げた感性に、素直に敬服する。

「そんな事よりも『パパ』はどうするつもりなのよ」

「とりあえず、『パパア』ではなんともできないし、ヴィオロン様に報告だな」

ローレンは彼女に抱きしめられていると、なんとも言えない安堵感が体をじわじわと染めていくのを自覚していた。本当に知らない存在に「パパ」と呼ばれている事実や、彼女の所在をどうするかを悩んでいたことよりも、なぜか守らなければいけない想いに駆られている。

そんな『パパ』とは違い、傍で見ている二人はこの幼子の存在をどう扱うかローレンに尋ねるが、不幸な結末にならないように頭を悩ませていた。身元もはつきりしない者をこの屋敷は受け入れるだろうか。答えは恐らく、否であるなど、ダヴィードは直ぐに結論を出したため、直接の上司に判断を仰ごうと思ったのである。

「そうだな」

幼子を抱き抱えたままローレンは立ち上がると、屋敷の執事が休む部屋に向かう。勿論、ヴェーラには軽く礼は済ませた。

「どうなったのか、明日、教えなさいよ」と彼女は扉を閉める前にこつそりと言っていたが、明日のモーニング・ティーの時間に結論

は出るだろうかあやしい時刻である。

隠し子に間違われるのは些か否めないとして、誘拐してきたと勘違いされないように話を進めるのは、どうしたらいいのだろうかと悩みだすと、足が次第に重くなっていくのが不思議だった。

結論は先伸ばしでもかまわないから、相手が眠っていて欲しいと願いながら、部屋の扉をノックした。

彼が彼女と出会い、保護者となる話を続けるためには、まず彼がこの国の第三王子の住む屋敷の執事になった辺りから話をはじめなければならぬ。

その日は比較的なにもない普通の日であった。いつもと違うのは、前日より風が強く、作業に手間がかかっていた事だろうか。一日の業務が思った以上に手間取ると、必然的にその後の行程も遅れることとなる。遅い夕餉を取ろうと家のものが食卓を囲む。時間のずれは生じていたが、いつもの行程、食事、就寝を行えば明日またリセツトされ、いつもと同じ時間、同じ作業行程の中、生活業務を行う。小作人の選択肢といえば、畑に出かけるか、羊を山へ連れていくかの違いだけだ。

今日一日が無事に終わったことを神に感謝するため、主人が長い感謝の言葉を語り終えたそのときに、家の扉が強く叩かれた。

居候であっても、衣食住は与えられ家族と同様に食事を許されるが、このような場合応対に出るのは、夫人ではなく一番下の息子でもなく、居候であるローレンだった。

食欲は当然あったが、表情には出さず暗黙のルールとなっている応対作業に向かう。ゆっくり扉を開けるとそこにはこの国の第三王子の姿があった。

目が合った瞬間、扉を力の限り閉ざす。大きな扉の音に、家人が驚いたまなざしをこちらに向けるが、そんな事は気にしていられない。

「御挨拶だな、ローレン。久々に会ったというのに、なんだその態度は――！」

目が合ったと感じたのは、ローレンだけではなく相手もそうだったらしい、視界を閉ざした相手がローレンだと認識して相手は怒鳴る。

「私は貴方様など知りません。どなたかとお間違いではないでしょうか」

絶対家に入れてはいけないと体全体が抵抗していた。

外から聞こえる声は知らない人間に対して発せられるセリフではないことは、誰の目から見ても分かる。加えて入り口をドンドン叩く音に、家人は尋ねずにはいらなかった。

「ローレン。誰なのだ」

「どなたなのか、存じ上げません」

「ローレン！！」

扉を叩く音は、今にも壊しそうな勢いで、相手の声は恥ずかしいぐらいに大きくなっていった。

「お早めにご退去を」

知らない知らないと言いながらも言葉遣いは隠せなくて、おそろく知り合いでローレンが気を使う相手だという事は予測されたが、このまま放置しておくわけにも行かなくて、近所迷惑な客人に家人が声をかける。

「失礼ですが、ローレンは知らないと申しております。どなたかは知りませんが、お帰り願えませんか」

「私を知らないと言いつ張るのだな、分かった。教えてやろう、私の名は、ソロヴィヨフ・ヴラディーミル・カールエヴィチ。それでも知らぬと言っのだな」

ヴラディーミルの名乗りに家人が青ざめたのは言うまでもない。

「なぜここに？」

おびえる家人のまなざしを背中に感じローレンは家を出た。

王子の名前など知らなくても生きていける田舎で、王家の鷹の名前まで名乗るのは嫌がらせなのか、その名前の意味を知らない天然なのか、何の問題も意識していない表情で王子はローレンに続く。

この家人たちの場合、ローレンの父セーヴァが軍の兵器開発主任なんぞに抜擢されている時点で、この国のお偉いさんの名前は耳にこびりついていることだろう。

セーヴァが死んだ今となつては、過去の悪夢として。

「いや、私としてはお前が恋しくてな」

どこまで本気なんだろうと、ローレンは顔を歪めた。空腹のせいか、久しぶりの王子の嫌がらせに体が本気で拒絶しているのか、第三者の立場から見ても表情は王子に向けられるものではない。

「僕はもうシャムでも何でもなし」

「だからだよ」

「は？」

「両親もいない、地位も後ろだてもいない　そんなお前が心配だな」

ローレンの父は、この国を戦争大国とさせてしまった技術を提供した科学者である。（正しくは、ローレンの父だけの知識ではなかったが）

王は褒美としてこの国の貴族より高い身分を科学者に与えた。アレキサンドリナという街に大きい屋敷を与え、街から外に出ないように縛り付けた。一人息子も同時に住居を与えたのは、科学者への人質。少年から青年になる初期の息子には拒絶できる意志もない。

貴族以上の身分があったのは過去のこと、現在は父が病死し、地位は返上しているため、ローレンはただの平民へと成り下がってい

る。母方の親戚の山村で居候として日々暮らしていた。

望まぬとも併合された国、巻き込まれた国民、足りなくなった兵力を補充するために連行された農民、自国民であつたとしても戦争というモノには憎しみを持つ人間が多い。ローレンがセーヴァの息子というだけで、他者の見る目は『人道に反する罪を犯したもの』として軽蔑していた者が多く、父方の親戚は勿論、過去に住んでいた村の人でさえローレンを拒絶した。彼の素性をよく知らない母方の親戚の親切に身を隠すように入り込んだのも事実である。

「本来の 用件は？」

心配だから、会いに来た そんな人ではないとローレンは知っている。腐つても王子様なのだから、自分でここまで来る必要はないだろう。わざわざ、住居を探し出してまで訪ねてくるのは、他者には言えない何か他の用事があるのだと、感じたのだが。

「とりあえず、私の執事になれ」

「いやです」

内容は大したことがなく、考える間もなく拒絶する。

「なぜ即答なのだ！！」選ぶ権利もないだろうとばかりにグラディ―ミルは詰め寄る。

「別に、殿下に心配してもらわなくても、今の生活には困っていませんが」

嘘だつた。

昔から住んでいた村では、父が科学者になつて貴族階級に召し上げられたということは、皆知っている。ポーランの兵器開発にかかわっていたというのは、よく知っていることである。母方の親戚も父方の親戚も、よく思わない人間が多い。親戚に疎まれながらも、生きていくには独立は不可能であつた。

飼っていた羊も鶏も居ない上、住む家も無い、自給自足の方法は分かつていても、明日飢えをしのぐ方法がない。アレキサンドリナから追い出された時に、こうなることは予測できたが、元に戻る選択肢をワザと選んだ。

父が残した財は多少あったが、ローレンはそれをすべて退職金がわりに屋敷の使用人に分け与えた。それは父が残した功績による報酬で生きていくのはローレン自身が反吐のでる行為である拒絶と、今まで世話をしてくれた使用人に対しての礼と是から無職になる謝礼でもあった。

「では、それとも何か、私のことをデーマと呼んでくれるのか？」
デーマと愛称で呼ぶか、執事になるかを天秤にかけさせる。ローレンは立場、愛称で呼ぶのだけは嫌だったので、たいていの要求には首を縦に振っていた。

それは過去の話である。

「嫌ですよ。デーマ様」

とてもきれいな笑顔で一言。

自分の要求が思ってもみない方向に通ってしまったので、ヴラデイーミルは拍子抜けしてしまう。「なぜそちらを選ぶ」と固まってしまった。嬉しさのあまり顔が赤いのはローレンの気のせいではない。

「満足されましたか、ではお引き取りください」

固まったままの王子に一礼をし、そのまま背を向ける。

静かに家の中へ帰っていく友人にヴラデイーミルは声をかけられず、ただ見ているだけしか出来なかった。

「王子は、何の用だったのだ」

なんでもなかったかのように、ゆっくり帰ってきたローレンを捕まえて、家人がローレンに質問する。その勢いは質問と言うより、尋問に近かった。

青ざめた表情は変わっていない。

「僕を召抱えろと」

「は？」

ローレンの拒絶の態度と、直々に王族がこんな家にやって来た事で、とても悪い結果を想像していた家人は驚きのあまり、声を漏らした。

家人が思考を整理するのを少し待ってからローレンは結論を伝える。

「勿論お断りしておきましたが」

「な、なんだって」

「何か問題でも」

「大有りだろ。今からでも遅くない、お受けして来い」

そして、ローレンは今夜の晩餐にはありつけず、実質、家を追い出されることになった。

当たり前前の反応だな　とは、いまさらながらに思う。

王子の顔が知られていない偏狭の地であつたとしても、戦争好きの王の噂は皆知っている。最近でこそ、直接的には戦争を仕掛けることはなくなつたが、いつなんどき気が変わるか分からない。その、息子が所望しているものを断つたとならば何をされるか怯えて暮らさねばならない。

実際は、ヴラディーミルは父王とはかなり仲が悪いので、そのような結果にはならないことはローレンは知っているが、王族の内部事情など知らない農民には、王の機嫌を損ねないための当たり前の行動だといえる。しかも、ただの親戚、ただの居候。自分の家族の平和と、厄介ごとの面倒まで見る必要があるのかを天秤にかければ、必然的にローレンを王族に差し出すことになる。

「殿下」

つい先ほど固まつた場所で、同じように固まつたままの王子に声をかける。

王位継承権は三番目とはいえ、この国の王子様である。このような場所で放置されたまま、誰も回収に来ないのは計算外だった。

せめて、ここに居なければ「お帰りになられていました」とでも言えたのだから、ローレンにとって、真に残念な結果である。

「先ほどの話。仕方がありませんので、お受けいたします」

ため息を吐き出して言う言葉に、固まつた王子の時間が動き出した。

「そうか」

満面の笑みで手を握り締め、上下に振り回す。

ローレンは嫌々ながらも、久しぶりの王子の子供のような行動に、変わっていないかと安心感を感じていた。依頼を受け入れた事を、心の底から喜んでいるのが見て取れるからである。

彼が最後にヴラデーミル王子を見たのは、王子とその妃の結婚式のパレードの日で、文字通り見た日である。

いつもどおりゆっくり降る雪の中。いつもと違うのは街中がその珍しい出来ごとで、皆興奮していた。普段静かな街が珍しく沸いていて、多少見物場所は違うものの貴族も商人も関係無しで、街路に並んで華やかな催しを見届けようとしていた。市民達の熱気で驚いていたが、自分もふらふらと街頭に歩みを進めたのは、二人を祝福しようと思ってではなくて、その催しに興味を引かれていたためだ。王位継承権は勿論ない王子が、他国から妃を迎えるのはそんなに珍しいことではない、ただ王族の結婚お披露目目的パレードを行うのは始めてで、外国かぶれの王子がどこかの国の王族を真似て大々的な結婚式を市民の前で行いたいと望んだのだろう。

王都ではなく、別荘地として作られたアレキサンドリナで行ったのはなぜかという話題が、新聞のしばらくのネタであった。

街道に並ぶたくさんの人たちの中に混じることはせず、一步後ろで時計店の壁に寄りかかっていると、遠くから王子たちが乗っていると思われる馬車が近づいてくるのが目に入る。盛装された姿は華やかで、このポーランで現実のものではないような雰囲気が出た。

冷やかし半分で見に来ていたローレンも、馬車の上で手を振る二人に釘着けにされていた。

ローレンが現実的ではないと感じたのは、王子の隣に座る女性のせいであつたのかもしれない。嫁いできた隣国のコウクナの姫は亡くなった姉姫に瓜二つで、姉妹なのだから当たり前なのだが、まるで彼女が王子の妃になったのかと思う。王子は、亡くなった王女に

恋心を抱ていた。その恋心を知っていたローレンは、亡くなった彼女のかわりに妹を選んだのかと少し疑う。

そんな事をぼんやり考えていると、王子がローレンに気がつき、こちらの方だけを向いて大振りに手を振り始めた。今までの華やかで高貴なイメージが一瞬で台無しである。周りの貴婦人からも小さく笑い声が聞こえる。こんな、子供みたいな人にそんな深い想いがあるはずないと一瞬の思想を振り払った。

王子は通り過ぎても振り返ってこちらに向かって手を振っていた。花びらや、紙ふぶきではなく、いつものように降る雪が、二人を祝福していた。

その日は、ローレンがアレキサンドリナを最後にした日でもある。

ヴラディーマルの屋敷はローレンの集落からさほど離れていない領土内にあった。

まるで、この場所に滞在しているのを確認してから、建物を建てたとは思えないと　ため息をついた。

切り出した石を積み上げたものから、生えているように突き出た鉄の門を潜り抜け、歩みを進める。この位置からは屋敷自体が見えないため、どれだけ大きな庭なのかと思う。

王族が住む屋敷なのだから、大きいのは当たり前なのかもしれないが、以前ヴラディーマルが与えられていた屋敷は、街の中にあつたためか、そんなに大きいとは思えなかった。

「アレキサンドリナに戻るのかと思っていました」

ここより、もう少し南の都会を思い出して、嫌な顔をする。ヴラディーマルも何か思うところがあつたようで、同じように表情は歪んでいた。

「あの屋敷はな、七番目の弟に取られた。王都は嫌なのだそうだ」
「いつ？」

「私が結婚してすぐ　だったかな。私は妃と共に南部から追い出されたわけだ。コウクナの姫が逃げないようというわけのように思えて仕方ない。」

そして北に戻された。しばらくは王都に居たが、もう少し政治的に動きやすい場所をと兄殿下に相談したら　ここの土地にある廃館を与えてくれた」

「こんなところに、廃館などありましたかね　」

山羊を連れてこの近くまで来たことはあるが、記憶の中に貴族が好むような屋敷は無く、遠く前に建つ建物など記憶の中の映像から、全く思い出さない。

「改修したから、元の形はさっぱり分からんぞ」

そんなローレンの頭を読むように、ヴラデーミルは軽く笑う。

「この土地にはお前が居た。偶然ではなく、兄殿下が更に気を利かせてくれたのだろう。私がお前と仲がいいのは知っていたみたいだしな」

あれは仲がいいと解釈するのだろうか、以前の記憶を思い出す。自分の屋敷で大声を出して自由気ままに入り込み、他者の意見など聞く耳も持たず（王族に意見などほとんど出来なかったが）、何かあったら名前を愛称で呼べと強要する。自分が困る姿を見て喜んでいた、俗に言う『嫌がらせ』を受けた映像が頭の中で浮かんで消えていく。

「兄殿下とは」

二人のどちらかだということは分かっていたが、王子が他の兄弟の話をするのははじめてで、どちらの兄を指して居るのか普通に興味がわいた。

「一番王座に近い方、ソロヴィヨフ・イジャスラフ・カールルエヴィチ第一王子だ。今は只の軍人だが、将来は良き王になれる方だ。」

第一王子でありながら、あいつに嫌われていたからな。軍人となつた翌日に軍隊の最前線で指揮を取らされておられたから、兵士の苦勞も、相手国の悲劇も目の当たりにされている」

「よく今まで、ご無事で」

「神は、尊い人をお守りくださるのだよ」

「そうですね」

神は誰も見守っていないという言葉を押し殺し、ヴラデーミルに同意した。

ローレンは無神論者ではない、休みの日には教会に行き、食事前には祈りをささげる、困ったときには、あきらめる前に願い事をしてしまう。以前奇妙な出来事に巻き込まれ、神の存在意義を知ってしまったため、心の底で少し反論してしまうのだ。

神様は、見守ってはくださっていないと。

扉の前に王子が立つと入り口の鈴を鳴らす。かなり分厚い扉がゆっくり開かれると玄関ホールが目に入った。

「お帰りなさいませ、坊ちやま」

玄関ホールには、知っている姿が頭を下げ、挨拶をする。

「ヴィオロン」

懐かしい元付き人に嬉しさのあまり、相手の名前を呼んだ。

「お久しぶりです。坊ちやま」

元主人に変わりのない挨拶をする。

ローレンが貴族と同じ身分を過ごしていた頃に屋敷の執事だとはじめから居たのがヴィオロンである。背の高い青年は、ふさわしくない行為を行うと一度は注意をするが主人の意思が変わらない場合は、静かに控え、なんともすこしやうい相手だったと思い出す。

因みに、田舎の山奥から突然身分の高い存在にさせられたローレンに、服の着せ方、選び方、言葉遣いなど貴族社会で生きていくための礼儀作法や知識を教え込んだのもヴィオロンである。

「元気だったのだな」

変わらないその姿に、自然に笑顔がこぼれるが、気がついた。

「ヴィオロンは何故捕まった」

「いくあてを探していましたら、普通に捕まりました」

「気の毒に」

屋敷の主人の悪口となる悲劇を堂々と語り合う二人に嫌な顔をせずブラディーミルが笑顔で割り込んでくる。

「因みに餌は、お前だローレン」

「ヴィオロン？」

「なんでしょう」

元主人の不快な表情を気にせず、丁寧に聞き返す。

「なんなのだ、それは」

「言葉どおりですよ。ヴラディール様が坊ちやまに会わせてくださると言われ、こんな土地まで連れて来られたのです」

「こんな土地って、アレキサンドリナよりはいい場所だと思うが」

「そうでしたか、大変失礼いたしました」

「ヴィオロンがいれば、私が執事になどなくても構わないですよ」

執事経験がローレンの屋敷に居た期間は少なくともある男性が屋敷に居る。経験が全くない自分を必要とする意味が分からないとヴラディールミルに質問すると、屋敷の主は気だるそうに答えた。

「そういうわけでもないのだ」

「？」

ローレンは言葉の意味が理解できなくて一瞬不思議そうに眉根を寄せる。

「ローレン様、私は、ヴラディール様にお仕える気はありません」

ローレンの疑問を解決する言葉を伝えたと、ヴィオロンは小さく笑う。

「って事を言うのだよ」

その言葉は聞き飽きたと顔に書いてある。あきらめの悪い王子様はヴィオロンを何度も説得し、何度も同じ回答を受けていた。何度も繰り返される勧誘の説得に、嫌な顔ひとつしないで、やんわりと笑顔を絶やさずに答えを伝える。双方とも、普通の人間ならば諦めるか怒るかしている状況を、ただ、変化無しに繰り返し、いまだにあきらめていない。

執事になることも、執事になることも。

「ではなぜここにいます？」

ローレンの疑問はもつともである、仕える気が無いのであれば屋敷にいるのはおかしい。

「ヴィオロンは霧の国からあいつがワザワザ連れて来た、有能な執

事なのだよ。ステュワードとバトラーの両方を難なくこなし、その指示も的確だと言う。フットマンが数名いれば、ヴァレットの仕事も任せられる。さらに家庭教師も併任できる素晴らしい男だ。妻も居ないから住み込みもさせられる」

ローレンは王子の言葉に眉をひそめた。唯一家庭教師という言葉だけが理解できるが、後は何を言っているのか分からない単語がヴラディーミルの口から出てくる。

「そんな、有能な男が昔から私の屋敷で仕えるのは嫌だというのだ」
「仕える主人は自分で選べるのが、この使用人職の良いところです」
子供のようにほおを膨らませ不満をローレンにぶつけるヴラディーミルとは対照的に、静かな表情でこっそり漏らす言葉にローレンは驚いた。

「そんなおまえが、よく僕の屋敷に居てくれたな」

「私の選んだ主人はローレン坊ちゃまです」

「そう繰り返すのでな、ローレンを我が屋敷に連れてこれば、ヴィオロンが付いてくるだろうと話をすると、かまわんと言ったのだ」

「ヴィオロン。長い間会わないうちに、性格が変わっていないか」

「全くの気のせいです」

屋敷のしかも執事となると、現状の薄汚れた姿で屋敷を歩くのは問題だと、ローレンはヴィオロンに浴室へ連れてこられた。ヴラディーミルも当然のようについてくると言っていたが、客人の行動に付き添うのは無礼ですよ』とヴィオロンに窘められた。

今は、ローレンもヴィオロンも客人扱いなのだと認識をする。ただ、客人が主人を窘めるのが普通なのかは疑問であったが。

「ヴィオロンは、何故、僕の屋敷に居たんだ？ヴラディーミル様が嫌だというのはよく分かるが、他の貴族の屋敷でも欲しがっただろう」

タブを隠すように引いてあるカーテン越しにヴィオロンの存在が

確認できるため聞いてみる。

「当たり前のことですが、この国の方はこの国の礼儀を執事に求める。私は祖国では有能とされていても、こちらの礼儀は全く知らない。相手への敬称の使い方でさえ知らないのです。私達は7名国から連れてこられました。皆、礼儀をわきまえない使用人だとレッテルを貼られてしまいました」

連れて来られたという個所に引っかけを感じたが、その疑問より相手への敬称への対応に思い当たる過去があるため、そちらを質問する。

「確かに、ヴラディーミル・カールエヴィチ様と殿下の事を呼ばないな」

ここポーランドでは、親しくないものの名前を呼ぶ時や、敬意を払う際に、対象の初めの名前と父の名前を合わせて言う。父の名は家と立場を表しているため、名前より重要視されていた。貴族でなかったとしても、本人の初めの名前のみで相手を呼ぶことは、無礼な行為に当たる。

「我が国では、自分より上の方をそのように呼ばないですよ。ロレン様は貴族ではないから、咎められる事もないだろうと 貴方の屋敷に逃げ込んだのです。何も知らない貴方には、実は私の国の礼儀作法はお教えできましたが、こちらでの正しい作法は、勉強しながら実行しておりましたので、とてもバランスの悪いものになっていったかと」

「知らなかったな、そんなそぶりは全く無かったし。何でも出来る完璧な執事だと思っていた」

ヴィオロンと会話を続けながら腕を動かし、湯が体の汚れを洗い落とした事を目視すると、髪に含まれた水分を搾り落とす。カーテンを引くと立っていたヴィオロンが恥ずかしそうに答えるのが目に入った。

「私にもプライドがありますので」

「屋敷にいるときも、そういつてくれればよかったのに。頭の固い

男だとばかり」

どこへ行くにも傍にいて、何かにつけ世話をやいてもらっていたが会話はあまり弾まなかった事を思い出す。メイド達も恐ろしい存在として、一線を引いていた。

「バトラーは自分の感情を表に出してはいけなくなっています。屋敷の主である坊ちやまにこんな話は出来ませんよ。今だからそのお話です」

汚れを落とした後はクロークに連れて行かれる。

「執事用のクロークがあるのか」

「このお屋敷の規模ですと、上位使用人には色んなものが頂けるみたいですよ」

さてさてとヴィオロンがローレンに見繕ったのはフロックコート。ヴィオロンは黒のフロックコート。ローレンは灰色のフロックコート。上着の丈の長いスーツである。

「個人の趣味に文句は言わないが、フロックコートであれば、ドレスグロブは灰色ではないのか」

ヴィオロンの黒の袖口から出ている真っ白の手袋を指さしてローレンは言う。

「執事は基本　私服です。かといってだらしない服装では、問題があると思われませんか」

優しく問いかけるヴィオロンの言葉に素直にうなずくローレン。その態度に満足そうに微笑むとヴィオロンは続ける。

「結果的に正装に近い服装になってしまします。主人も正装、使用人も正装。知らない方が見ればどちらが主人か迷うでしょう。ですので、執事はワザと『外す』のですよ」

「外す」

「ローレン様は『外す』のはお嫌いでしたし、ワザと『外す』事が出来るように、灰色のフロックコートをお選びしたのですよ。これならば、洋服に合わせなければならぬ灰色のドレスグロブはかえって嫌味です。抵抗なく『白』または『黒』が合わせられる

でしょう」

「相手には、タキシードと組み合わせを間違えていると認識されるのだな」

露骨に嫌な顔をして話を聞いている。

「使用人は、仕方のないことなのですよ」

渡された黒の手袋に違和感を感じる、作法が合っていないからではなく、右と左の生地に分厚さが違うように感じられた。指を通すと厚さの違いは気のせいではないことがよく分かった。

ローレンが左手のドレスグローブに指を通した状態で停止しているのに気がついて、ヴィオロンは「特注というわけではありませんが、右より左の方が厚くて強い生地になっています。利き腕とは逆の方が酷使しますから、ワザと丈夫に作ってあります」と語った。

どのように酷使するのかは想像がつかなかったが、これから覚えていけば良いと説明を求めるのはやめて、五本の指を奥まで押し込み、隙間を埋めた。

「イジャスラーフ様のバトラーは年季の入ったジェントルマンですよ。元々、イジャラスラーフ様は軍服ですから、『外す』必要はないと思うのですが、ワザと古い組み合わせをスマートに着こなされています。年齢も私どもとは違い、大分高齢の方ですから、それも違和感がないのですね」

「古いスタイルも『外し』で問題ないのだな」

ローレンの問いにヴィオロンは「そうですね」と答えた。

「やっと来たか」

汚れた小作人から、ジェントルマンに様相を変えたローレンはヴラディーミルの待つ部屋へと案内された。

部屋にはウラディーミルが座席に着き、壁際に背の高い顔の整った青年たちが整列している。

ヴィオロンの後ろに並び、屋敷の主の前まで来ると頭を下げる。

「やはりお前には、スーツ姿が似合っているな」

「久しぶりすぎて、窮屈ですね」

『外し』した手袋を隠したくて両手を後ろに回す。そのしぐさに
ヴィオロンは気がつき「すぐになれますよ」と言った。

「今日からお前を私の屋敷の執事へと任えることを許す。私と大切なものを守ってくれ」

「殿下」

望んで執事となるわけではないのだが、形式的な言葉とそうでない後半の言葉に少し胸が熱くなった。この言葉にて、ローレンはこの屋敷の執事となった。

ローレンがヴラデーミルの言葉に、胸を熱くしたことを後悔するのは、もう少し先の話である。

「でなんで、僕が責任者なのだ」

何の責任者なのかは分からないが、役職『責任者』が不服そうな声を漏らす。

「私はローレン様にお仕えしているという前提でこの屋敷に配置されています。使用人の責任者としてローレン様がお仕事をしているお手伝いをするわけですよ」

なにもおかしくはないでしょうとヴィオロンはローレンに返した。
「おかしいだろ、責任者が下の者に教えてもらって業務をこなすなど」

「責任者ですから、基本業務は監視ですよ。実務なんて覚える必要はありません」

「出来ないことを監視・確認なんてできるか」

理論上は仕組みを知っているし、ヴィオロンの言う意味も理解できる。だが、責任者なんて役職で、具体的な業務を知らないし、できないのは問題ではないのか。

「まず、役職をしつかり覚えていただきましょうか。他の者の前で責任者なんて言ったら、笑われてしまいますしね」

「おまえが、教えただろ」

数分前に「貴方は責任者としてお仕事をしていただきます」と言った者が、その言葉を否定し笑う。当然ローレンは納得がいかなくて、抗議の声を上げた。

「分かりやすく言いすぎました。大変申し訳ありません」

素直に言われた通りの言葉を覚え発言する主に椅子を引くと目の前のテーブルに手帳を差し出した。少し古ぼけた手帳には手書きの組織図が書かれてある。ヴィオロンが書いたのだろうかとローレンは思いながら、引かれた椅子に浅く腰かけると説明が開始される。
まずは図の一番上とその次に連なる円（組織図であれば人、または

役職である）を指さしてヴィオロンは言った。下位の位置に幾つもの円があることから、『責任者』という立場を説明するつもりなのだろう。

「ローレン様はステュワードもしくはバトラーと呼ばれる執事職の仕事をさせていただきます。ほとんどは私が致しますので、本務は何もしていただく必要はありません」

「そのステュワードとバトラーとはなんだ」

円の内部には、今ヴィオロンが言った『ハウス・ステュワード』と『バトラー』と記載されているが、ローレンの理解できる言語ではなかったため読めず、ヴィオロンが話した言葉を繰り返す。

「ポーランでは皆様『執事』と呼んでおられますし、区別されている屋敷は少ないと思われるので、ローレン様も聞きなれない言葉だと思います。」

ステュワードは主人のかわりに屋敷の財産の管理を行います。フットマンやメイドなど使用人を雇用・解雇も自由です。領土の境界を管理し、土地を貸し与え、賃借料を徴収します。賃借の結果トラブルとなった場合鎮圧させる必要がありますが、グラディーミル様は管理する領地はありませんので、この作業は不要でしょう。財産管理を一任されていますので、資金を何に使うのか、何に使われたのか、どれだけ不足なのかを確認・使用許可を行います。主人が不在の場合次に権限を持つのがステュワードです。グラディーミル様が奥様と共に、屋敷を留守にされた場合は、すべての権限がステュワードに委譲されるわけです。

バトラーは、主に施設管理を行います。施設とは、屋敷・庭・馬舎・食事・人材を指します。ステュワードが屋敷の外を管理するかわりに、バトラーは内部をすべて管理するわけです。屋敷の維持はフットマンやメイドに任せます、庭は庭師に、馬舎と馬は馬番に、食事はシェフに、人材は、女性の部分をハウスキーパーに任せています。食卓に出る食器の管理と添えるワインだけは、他者に任す事は許されません。ステュワードが居ない屋敷では、バトラーが両方

を兼務します。あとヴァレットの居ない屋敷では、そのかわりもするはずですね」

「フットマンとヴァレットとは」

「フットマンとは、メイドの男性職ですよ。本来はメイドがフットマンの女性職でしたが、最近ではメイドの方が多くなってますしね、ローレン様にはこちらの方が分かりやすいかと。こちらの国ではメイドが表立つのが当たり前となっているようですね。ヴァレットは主人の身の回りのお世話をする人間ですね。洋服を選んだり、マナーを注意したり、飲み物の管理をしたり」

「飲み物とはそんなに重要なものなのか」

「人として生きるのに、一番大切です。人とは、神の血、ワインと共にあるわけですよ。他者は飲み物で主人の知性を疑うのですから、使用人は主人が恥ずかしい思いをしないために飲み物を選ぶわけです。まあ、選ぶワインで同じ料理も味が変わりますから、腕を振るったコックのために最高の組み合わせを差し出す楽しみもあります」

「ホントに文化が違うのだな」

「ええ、ワインや紅茶に大量のジャムを添えて舐めるのが当たり前だと言われた日には、国に帰りたくなりましたね」

「ジャムは大事だろ。舐めるのが嫌なら、混ぜて溶かしこめばいい」

「ジャムがおかしいですよ」

「ハウスキーパーは具体的には何をしています？女性の部分を任せるというだけ、女性なのだろうが」

「家事のすべてを決める権限を持っている女性です。後は、メイド達の責任者。という形ですか、メイド達の教育をお任せしています。相応しくない女性の報告は彼女から頂くので、こちらとは直接関わりが多いかと」

聞きたい事を確認し、分からない言葉が尽きるとローレンは表情を歪めた。

長い説明で理解できなかったわけではなかったが、思っていた以

上に複雑な使用人事情に頭が拒絶反応を起こしたのだ。

「使用人とひとくくりにしてたのだが」

「使用人になって初めて分かる序列です。ヴラディーミル様は私の国の方式がお気に召したようで、他の貴族のお屋敷はここまで明確には分かれていませんよ。それに　ローレン様は何もされなくても、対外的に恥はかせません」

ヴィオロンはこんな熱い男だっただろうかと記憶をたどる。口調そのものは昔と全く変わらないのだが、『大切にされている』という気持ちがじわじわと感じられるのが、ある意味暑苦しい。

質問をすれば返してくるし、聞けば教えてくれる、足りなければ補足し、ローレンの機嫌を損ねそうになったら距離を置く。当時は業務上必要最小限の会話と、親しくならないように接せられていた、むしろ関わり合いを拒まれていたように思う。ただ、こんなヴィオロンが本当の姿であっても悪くない気はしていた。

「ローレン様、明日からは使用人として生活していただきますので、朝は早いのですが」

「何時ぐらいに起床すれば影響がない？」

「八時にはお支度が済んでいれば問題ないと」

「それで早いのか」

「はい。では、今夜は軽くお召し上がりになって、お休みください」
そう言われて目の前に軽食を差し出されたことで、自分の空腹を思い出す。

「よく知ってたな」

「お顔の色でなんとなく」

王子のせいで夕餉を逃してしまっていたが、食べるもののなく、また、少ししか食べなくても平気という生活に慣れてしまったため、あえて食事の話はしていなかった。何も話していないのに「なんとなく」事情を察してしまうのは付き人として素晴らしいスキルなのだと思う。改めてヴィオロンを評価し、かなり遅い夕餉を胃の中に落とした。

朝の仕事の一番は、主人を起こすこと。ヴィオロンがローレンに依頼したのは主人の支度の手伝いだった。

モーニングテイーをいれるため、移動式のワゴンに乗せたサモワールに炭を入れ湯を沸かす準備をし、上のポットに茶葉を入れる、紅茶液の用意をすると、サモワールごと屋敷の主人の部屋まで移動をはじめめる。向かう途中の廊下の窓から見えた庭には、これから起こす予定の屋敷の主人、ヴラディーミルが剣の稽古をしていた。

真剣なまなざしが、いつもの暴君とは違う人物に見えるのが不思議である。

部屋の前までたどり着くと、扉をノックする。先ほど窓の外で剣の稽古をしているのを目撃したため、居ないのは知っていたが、とりあえずの礼儀である。

当然室内からの反応は無い。

炭は直ぐに燃え尽きる心配は無いが、湯気にさらされた茶葉がふやけすぎて入れ時を逃してしまうのが残念で、先に主人の朝の予定を確認しておくべきだったと後悔していた。

「あら、お久しぶりですわ。ローレン様」

入り口でうつむきながら悩んでいると、不意に声をかけられた。

声のほうを向くと、隣の扉の前でコウクナの姫が笑顔で立っている。

「フェイカ様」

心の咎の一つとなっている女性の名前をいつぶやく。彼女がもういないと知っているのだが、頭の中は居ないはずの人間を認識してしまう。

目の前に居るのはその妹姫でヴラディーミル王子の妃。

「失礼しました。エリン様」

隣国コウクナの五番目の姫エリンである。

「まだ、姉姫を覚えて居てくださるのね」

五番目のコウクナの姫は笑うが表情が悲しそうに見えたのは、ローレンが後ろめたいせいだけではないと思う。

「デーマ様は剣の稽古ですのでお部屋にはおられませんわ」

彼女の親切に知っていますとも答えられなくて、困ったようにローレンは笑う。

「デーマ様が朝ちゃんと起きられるなんて思ってもおられなかったでしょう。今お呼びしますから」

そう言って部屋の中に入ると扉を閉めた。

取り残された状況下、普通執事が呼びに行くのではないだろうか、頭を抱える。

「まだ続けたいから紅茶でも入れてもらいなさいですって、お待ちの間、かまわないかしら？」

控えめにあけた扉から、少し首を傾けてこちらに質問するしぐさに、ローレンは「喜んで」と返事をした。

開かれた女主人の部屋に入室すると、甘ったるい華やかな色や匂いがほのかに漂う。貴族の女性の部屋に入ったのはこれがはじめてで、慣れない香りにローレンは軽く頭痛を起こしていた。

部屋の中に立つ夫人の姿が二人に見えるのは、頭痛のせいだろうか。

女性独特の香りは、こうまでも自分を惑わすのかと痛む部位を抑えるが、そんな訳はない。よく見ると洋服の色が全く違うため、幻覚でないかと認識した。

「えっと エリン様？そのお嬢様はどちらさまで」

よく様子の似た相貌、背格好の女性が二人。一人は先ほどヴラデイミルに繋いだ彼の妻。もう一人は誰なのだろうとローレンは尋ねる。

「私の妹ですわ。身の回りをさせようと連れてきましたの」

エリンよりも少し幼い表情が妹だと知る方法である。

本人がいなければ、妹がエリンだと言われても誰も疑うことはないだろう。

似た顔が二人並ぶことでエリンをフェイカと間違える幻影は見えなくなる。

「侍女のヴェーラでございます。ローレン様以後お見知り置きを」
妹姫が侍女と名乗る。行儀見習いを兼ねてか、姉の心の支えとなるべく母国から送り込まれたか、今の発言からは予測もつかないが本人は、女主人の妹ではなく、侍女として仕事をするのだとローレンに伝えていた。

「影武者にもなりますのよ」

「お姉さ エリン様」

言いなおした姉の名前が冷たく響く。恥ずかしいからおやめなさいとばかりの表情でヴェーラは姉を睨んだ。

笑えない冗談ではあったが、夫人が気の毒であったため、□元に手を当てた。□元に手を当てたのは、ひきつった表情を隠すためではなく目線を二人から外すためだ。女性のように添えるようにではなくて、咳込む直前の様な姿勢をとったため、必然的に目線が外れる。当初の目的であった、女主人へのモーニング・ティーを入れる作業に入った。

手元の懐中時計に目をやりながら、ローレンの作業をまるで珍しいものを見るように見つめていた二人を気にすることなく作業を進めると、頭痛の原因で甘い香りをかき消すように、紅茶独特の茶葉の香りが部屋に漂う。

出来上がった紅茶液を二人分カップに注ぎ、下の蛇口からお湯を注いで濃さを整える。

「お待たせいたしました」

二人の前に紅茶の乗ったソーサーと小さなクッキー。黄色のジャムを差し出し軽く会釈した。

「おいしい」

カップに口をつけたヴェーラが感想を漏らす。エリンも同じような感想を持ったようで微笑んで頷いた。

エリンはそのまま、紅茶をうまいとほめられた事を満足そうに微

笑むローレンのほうへ視線を動かすと「そんなお顔もされるのですね」と驚いた表情で言葉を漏らす。

「いつもと変わりませんが、何か変でしたか？」

「以前　コウクナに來られた時も、このお屋敷で先ほどお見かけした時も眉間に皺を寄せておられて、笑われる姿ははじめて見ましたわ」

そんなつもりはなかったと、表情を引きしめると、自然に無表情に戻る。

「　」

女主人と侍女の瞳でガラスに映った自分の表情に気がつくとなるほどと納得した。せめて女主人の前だけでも気をつけようと思った。

「変わった紅茶の淹れ方をされるから、どんな味かと思ってしまいましたか　」

「サモワールはご存知ないのですか」

初めて見たと返事する代わりに二人は大きく頷いた。

「ポーランの貴族で使用している紅茶専用の器具ですよ」

ローレンはサモワールで淹れる紅茶が好きだった。金属製の大きなそれは、装飾だけは細かくあでやかだが、傍でよく見なければ只の金属の壺にしか見えず、壺であれば陶器のそれに負けてしまう。

紅茶以外に使用方法はなく、他に代用するすべもない。最近ではティーポットに茶葉を入れて直接抽出する方法が早くて楽なため、サモワール自体の使用方法も知らない貴族も増えている。分解して、組み立てる工程で、炭を入れ、茶葉を立て、時間をかけて湯を沸かし、湯気で茶葉の香りを楽しむ。少し手間をかける事が、楽しくて仕方ない。楽しんで入れたものの所為かサモワールを臆目に見ているためか、ティーポットのみで入れた紅茶より湯の味がマイルドになっている気がして、昔から好んでサモワールを使用していた。

他国から來た姫君は、ティーポットからの紅茶しか飲んだ事がないのだろつ。隣国から嫁いできて、今日の今まで、誰も彼女たちに

サモワールを使った紅茶を淹れた事がないのだと理解する。

「もしかして　デーマ様は、紅茶はこれで？」

気がついたようにエリンが質問をする。

「殿下でしたらたぶんご存じかと」

質問の意図がよく分からなくて、『サモワールを知っているのか』と勝手な解釈をし、返事をする。「そうですか」と消えそうな声でうつむいてしまう。

その様子に、何か気に障ったのか確認しようと思ったと同時に、寝室から続く扉がノックされヴラディーミルが現われた。

エリンとヴェーラは立ち上がり主人に頭を下げる。

「待たせたなローレン。戻ったぞ」

目的の人物が現れたので、夫人たちに礼をして部屋を出る。主人と夫人の二つの部屋をつなぐ寝室に入る気は全くなかったため、一度廊下へで、主人の部屋へと向かうためだ。

「寝室を通れば早いのに、お前は昔から気を遣いすぎだ」

「エリン様も嫌がるでしょう」

入り口で仁王立ちするヴラディーミルをどかして、応接セットの前までたどり着くと、先ほどと同じく紅茶液に湯を足す。先ほどより、紅茶液の濃度が濃くなっているため、湯の分量は多少多めに入れ、砂糖とミルクを置いた。

「よく覚えているな　私がミルクだと」

「ラリサが、殿下はミルクだから珍しいと言っていましたから」

ラリサとは、ヴィオロンと同じくローレンの屋敷で働いていたメイドである。

好みの分量の砂糖とミルクをカップに入れ、ティ・スプーンをひと回し。ミルク独特の甘い香りが漂う中ヴラディーミルが満足げにカップに口をつける。

「サモワールは香りが良いのだが、優雅さに欠ける　」

よい香りは時間と共に消えていく。匂いが拡散されるとカップの茶が飲むことで無くなっていくからだ。サモワールを使用すると、

カップから紅茶が無くなっても香りは残る。漂う匂いの元は濃い紅茶液を頭に乗せたサモワールから漂わせているからだ。

「それは殿下の偏見です。サモワールほど有意義な器具はないですよ」

ローレンは得意げに笑うとサモワールの蛇口から湯を小さなタブに注ぐ。ドレスグロブを外すと、乾いたタオルを浸して強く絞って簡単な蒸しタオルをつくり主人に渡した。

「こういう使い方も可能なわけですよ」

「便利アイテムとしても有意義なのは認めよう。だが、足して飲むというのが、潔くない」

ティーポットであれば、茶葉の多さと蒸す時間を計算し、自分にあった飲みやすい茶を入れることが出来る。対して、サモワールは濃い紅茶液に湯を足して自分の飲みやすい濃さを調節する、その便利な方法がヴラディーミルが好きではないのだった。

「そうでしたか」

好みは人それぞれ、ローレンが好きなものを主人が好むとは限らない。主人の好みに合わせるのが使用人というものだろう。

本来ならば。

「では、明日からもサモワールで」

「何故そうなる」

「ポーラン人でサモワールを使用されないのはどうかと思うのですよ」

本当は主人の苦手な事をささやかに行いたいのだが、直接そんな言葉を言えるはずもない。目の前の相手に子供だと馬鹿にされるのは自分のプライドが傷ついてしまう。だから、至極もつともたと誰もが思う個人的な意見を理由にした。

「まあ、サモワールは香りが良いからな。衣服からほんのり漂う辺りは優雅かもしれん」

小さなローレンの悪意も気にすることはなく、主は残りの紅茶を飲み干した。

体と心の力を奪っていく業務が一つ終わり、主人から解放されたローレンは執事室へ戻る。あれから服を着せて、部屋から出るという作業が主人の長話のせいで思うように進まない。

ただ、主人を起こし、紅茶を入れ、洋服を着せかえる作業に何故こんなに時間がかかるのだろうとため息を吐いた。

「思ったより、お早めに終わられましたね」

懐中時計を確認してヴィオロンが言くと、疲れ果てた表情でローレンは「小ぶりの炭が完全に灰になる時間が、『早め』なのか」と返した。

「昼過ぎまでヴラデーミル様のご予定はありませんから、ローレン様を解放されないかと思っていましたですよ」

ヴィオロンはローレンからワゴンを回収すると、応接セットに座らせる。

目の前に紅茶を出すと、回収したワゴンを押して部屋から出て行った。

一人になったローレンは、紅茶の横に当然のように置かれた黒色のジャムを口に入れると手を止める。

「なんてジャムなんだ」

黒に近い赤、赤ワインの原料になる葡萄に似た色だが、葡萄とは違う。果肉がないために何で作られているのかローレンは分からず、ただその甘い味に幸せを感じていた。

しばし休息を取った後にローレンはヴィオロンに玄関ホールに連れて来られる。そこには二人の少年が居た。フロックコートにケインを持っている姿が使用人だという風には見えなかったが、壁に近い位置で並んで立ち、こちらに気がつくと緊張した面持ちで頭を下げる態度から、この屋敷の使用人であると気がついた。よく見れば

『外し』た姿である。

同じ背格好で面影が似た雰囲気の二人は兄弟なのだろうかと見たものを思わせる。主に違うものは髪色。

「これらが私の仕事を補助する。アンダー・バトラーです」

ヴィオロンはそう言って二人の少年を紹介した。

アンダー・バトラーってなんだ！という表情でローレンはヴィオロン達を見てしまうが、口には出さない。今までの傾向から、この後詳しい説明が続くのは分かっていたからだ。

「応接室がメインの東館。客室がメインの西館。双方でフットマンの管理を任せています。さすがにこの屋敷すべてのフットマンの管理は一人ではできませんので」

「東館のアンダー・バトラーはダヴィード」

「よお、おぼっちゃま」

ローレンから見て左側に立っていた少年はダヴィード。赤に近い猫っ毛の髪でジェントルマンスタイルを着崩して着用している。彼の『外し』なのだろう。着崩したシャツはだらし無いと評価する以前に、彼によく似合っていた。だらけた服装に合わせているのか、挨拶に礼儀は感じられない。

「西館のアンダー・バトラーはミハイール」

「はじめましてローレン様」

対象にすべてをきちんと（普通に）整えられている反対側の少年はミハイール。白に近い金色の髪が美しい。につこりほほ笑む姿は、女性ならば数秒で舞い上がらせる事ができそうだなとローレンは心の隅でその光景を想像した。

「管理というバトラーの補佐か何か　だから、アンダー・バトラーなのか」

質問をしようとして自己解決してしまうと、そのしぐさを見てダヴィードが馬鹿にしたように笑った。

「ダヴィード、ローレン様になにか」

ヴィオロンの冷たい声に彼の笑顔が凍りつく。誰もがわかる硬直

したしぐさが、恐怖を感じていることが分かった。

「問題ないのでしたら、屋敷の案内をお願いしましょうか」

ヴィオロンの視線から開放されたことで、ダヴィードは安堵し、失敗したとばかりに舌を出した。

「ダヴィード」

ダヴィードが出している舌を見てローレンは言葉を漏らす。

「君はベリラント人なのか」

「はい。彼らは、ベリラントの血族です」

ヴィオロンがそういうと、ミハイールも舌を出す。少年は二人とも舌に刻印を持っていた。

今はポーランの領土となっている旧ベリラント国。戦争に負け、併合された小国だ。男子は純血を守り続け、他民族との子供をもうけることはしない。いつまでもベリラントの誇りを守ること、精神的には併合をうけつけないと思いつけているのか。彼らは純血の証に、生まれた赤子の舌に焼印をつけていた。

見た目も整った顔立ちが多く、貴族たちの間で噂になっていたことから、ローレンはベリラント人の風習を知っていたため彼らの舌の刻印が痛々しく見えた。

「ベリラントの純血は貴族出身ばかりだと思っていたが」

「王族の屋敷ですから、下級貴族でも使用人として働いてもおかしくないですよ」

ローレンの言葉に、ミハイールが笑顔で答える。

「この屋敷では、使用人の身分は役職で決まります。彼らは貴族階級ですが、この屋敷では、私の下　貴方の下の階級となります」

「だから、先ほどのような行為は大変失礼なのですよ」

ダヴィードを一瞥し、ローレンに向き直ると笑顔を整えてミハイールは言った。

「いや、別に気にする事じゃないだろう。ただ、僕も人のことは言えないが、執事にするにはかなり若くないか二人とも」

「確かに、ローレン様がお見かけになつた執事達は質の良い使用人

でした。スキルが高いということはそれだけ長くお屋敷に務めているということですよ」

由緒正しきお家柄であればあるほど、良い使用人を長く屋敷に置いてあるのだろう。不都合がなければずっと同じものが勤め、彼らが失脚すると次に長く勤めていた使用人が上へ上がるというシステムが多い。ローレンは貴族と仲良くしていたわけではないため知っている執事の数はいくつか少ない。王に呼ばれるなどしてどうしても出会わなければならない時に、ほんの数分顔を合わせていただけ。

「とすると殿下が変なのかな」

「それは否定しませんが、若いということは、それだけ可能性が高いということです。さて、ミハイールお願いしますね」

ヴィオロンに言われてミハイールは頭を下げた。

一階に食堂を、二階に客室を並べていることから、西館は客室がメインとなる。廊下の装飾は落ち着いた感じで、所々花や景色の描かれた風景画が飾られており、絵が劣化しないように日差しをさえるレースもよく見ればシンプルなものが出ていた。

「普段は二階でお客様のお相手をしていますから、どうしても自分の趣味に片寄るんですよ」

そういいながら、ミハイールは前を歩く。

「フットマンにすべてを委ねてる訳じゃないんだな」

「普通ご対応は上位使用人がします。ローレン様のお屋敷もヴィオロン様がされてませんか？」

疑問を唱えたローレンはそういわれて納得した。確かにどの屋敷でも大体執事が対応していた記憶があったからだ。

「主人の代わりですからね。細かい事はフットマンに任せますが、同じ模様の扉を何枚か目にしたところでミハイールが足を止めた。お前たち、何をしているのですか」廊下の一番奥の扉の前で数名が扉を囲むように立っている。全員が制服を着ていることから使用人だということは想像はつくが固まって何をしているかまでは想像がつかない。

「ミハイール様」

慌てた様子で一人の青年が声を発すると、集まっていたものが散る様に道を開く。

扉の前で使用人が片手を庇うようにうずくまっていた。

「彼がどうか？」

姿が見えたからと言って何が起きているのか想像する時間が無駄だとミハイールは報告を求めた。

「ランプを引っかけてしまい」

言われれば、辺りから油の匂いが微かにし、床もよく見れば彼を中心に濡れていた。袖が焦げているのを発見したローレンは座り込んだ使用人と同じ目線まで膝を落とすと「火傷は？」と声をかけた。

「へ、ああ。大丈夫です」

ミハイールではなく突然知らない紳士に声をかけられ驚いた使用人は、焦げた袖を隠して、視線を反らした。

ローレンは彼が隠している手を無造作に取ると濡れた手袋を引き抜いた。言葉通り、手は赤くなっているもの大事ではない。

問題があるとすれば、濡れた手袋が簡単に引き抜けた事だろうか。「これだけ小さい手だ。男性モノでは緩くて簡単に脱げてしまう。」

女性用のドレスグローブは用意できないか」

軽い火傷をおった彼の背格好は回りの使用人達に比べ小さい。手袋も上着も体には合っていないのだろう。

「彼に女性用を着させると？」

使用人の一人が、不満そうな声を上げた。

「作業は安全にこなしてこそだ。女性用と言っても、サイズが一回り小さいだけ、言わなければ女性用だって誰も気づかない。多少薄い分 違和感はあるだろうが直ぐになれる。サイズが合っていないものを着用しているほうが見た目が悪い。上着や手袋、靴などは補正が効かないからな」

「確かにそれは一理ありますね。ジルに頼んで手袋を至急持つてき

てください」

ローレンの話聞いていたミハイールは、近くの使用人に指示をする。不満そうな表情だった男は、一礼をし、走るようにその場を去った。

「彼には火傷の処置と、残りの物は現状復旧をお願いします」

指示がされると、使用人達は壁や床にかかった油を拭き取る作業をはじめめる。濡れてしまった絨毯は、その部分を囲み四角に切り取られると、同じような大きさの絨毯が持つてこられ空いたスペースにはめ込まれる。何事もなかったように場所は修復された。

「絨毯はすべてを交換にはならないんだな。なるほど」

長い廊下に一連で敷かれている絨毯を丸々交換すると考えていたローレンは、経済的に安価で、時間もあまりかからない作業に感心していた。

「ポーランドから出来る手法ですよ。毛の短い絨毯なら、つぎはぎがみつともないですから」

注意してみれば、毛色が違う場所が数箇所確認できる。同じ色の絨毯だからといってこの様に部分を切り取り差し替えていれば、外気にさらされている時間が違う為元々あった部分より差し替えた部分が鮮やかになるのは仕方ない。ただ、緩い日差しの中で目を凝らさなければ気が付かない程度、大勢に影響はないと感じられた。

「こんな作業は滅多に行いません。事故を発生させた彼は、使用人としてかなり問題な失敗をしています。解雇しないのですか？」

管理者として質問されたローレンは表情も変えず、答える。

「今回は彼だけのせいじゃない。支給された制服がリスクの原因だろ」

その答えにミハイールは微笑み「失礼ですが、面倒な考え方をされるんですね」と言った。

簡単に西館の説明を受け、元の玄関ホールにたどり着くとダヴィードが待っていた。

「西館で何にもなかっただろ」

自分のほうに歩いてくる二人を見つけにっこり笑うと嫌味を言う。

「東館のように汚れてはいませんか」

笑顔を貼り付けたままのミハイルも軽く返した。

「な、ん、だ、と」

返された言葉が感に触ったのか、ダヴィードがケインでミハイルに殴りかかる。ミハイルは自分のケインでそれを牽制した。

木と木がぶつかり合う音が玄関ホールに鈍く響く。

二人は似つかわしくないケインを持っていた。目の前の小競り合いでそのことに今はじめてローレンは気づく。

「なぜ杖が必要なのだ」

足が悪いようには見えないし、歩行用とすると長さもそんなに長くない。

「紳士の嗜みだぜ。ぼっちゃん」

「ヴィオロン様も本来は持っていたいのだろうけど、執事が持っているのっておかしいですし」

向かい合いケインを打ち合わせたまま二人は疑問に答える。

「じゃあ何故、持っている？お前たちも執事といえば執事だろう」

アンダー・バトラーはバトラーの補佐だとヴィオロンは言った。

執事が持っているのがおかしいというのなら、この二人も持っているのはおかしいだろうとローレンは返す。

「僕らが持たされているのは、護身用ですよ」

「そうそう、ミハイルに寝首かかれないうちに」

「その言葉そのままお返ししますよ」

アンダー・バトラーの二人は仲が良くないようである、逆に仲が

良すぎてこのようにじやれているのか、ローレンには判断ができなかった。自分の疑問に対しては二人とも回答したため、とりあえず次の行動を待つことにする。

「そうか」

にらみ合ったままの二人と、黙ってそれを見ているローレン。三人は時間が止まったかのように何も言わないし動かなかった。

「いや普通止めるだろう」

その時間を動かしたのはダヴィード。黙ったまま見ているローレンにケインを向ける。

「そうなのか、貴族どおしが暴れている現場に遭遇したことが無くて。大人しく見ているのが礼儀かと」

「あば いや、貴族とか関係なくて まあいいか、面倒だ。行くか」

無表情に黙ったままのローレンに自分の想いを説明しても無駄だと早急に決め付けたダヴィードはローレンの手を引き自分のテリトリーへと歩みを始める。

ダヴィードが案内する東館では、接客は一人の女性が行っていた。西館のように歩いて案内されるのかと思えば、応接室に通され椅子に座らされてダヴィードと対話する形で業務内容を教えられる。その間、紅茶などはその女性が用意する。他の使用人の姿はない。

「普通お前が対応するんだろう」

ローレンはダヴィードに耳打ちする。

「まじでか、何も知らないと馬鹿にしてたら、ヴィオロン様みたいな事言うんだな」

もともと知っていた知識ではなく、先ほど西館でもう一人のアンダー・バトラーに教わったばかりの知識だ。

気まずそうに持っていた杖で頭をかくと、上目づかいで小さくつぶやいた。

「本来はそうだ。ただ、俺も含めこちら側のフットマンはあまり人

前に出したくないんだよなあ」

自分を含めと言ったその理由はなんとなくわかる。

ダヴィードは顔だけ見れば整ったどこに連れ歩いて問題ない召使であろう。大きな問題はその着崩した服装と言葉使いだ。他者に指導する立場の者がそれならば、フットマン達はもつとひどいに違いない。（これはローレンの勝手な推測でしかないが）

「それに、お客様も綺麗なお嬢様がお相手なら文句も無いだろ」

「はあ」

まあ、昔ローレンの屋敷でも、ヴィオロンがいなければメイドのラリサが客間・応対をしていたのだから、間違った方法ではないのだろうと思う。

「人前に出して恥ずかしくないようにするんだったら」

ローレンが指したのは彼女の手。

「頑張っているのは分かるが、可哀そうだろう。ドレスグローブは支給しないのか？」

彼女の手は作業のせいか荒れ、所々裂傷が目立つ。ここでも女物の手袋が必要になるとは、とローレンは内心する。

「うわ フェミニスト」

ダヴィードは刻印が見えるように舌を出して嫌そうな顔をする。

「お前 人前でそんな顔するなよ」

「ぼっちゃんの前だけだせ」

同じように刻印が見えるように舌を出して悪戯っぽく笑った。

嫌な顔も、笑顔も舌が出るのか、とローレンは表情を歪める。

「ただなあ、こいつは女物の手袋は小さいんだよな」

周りにメイドがいなくて比較はしていないが、彼女は女性にしては背が高いように思われた。

「なら、男性用で良いだろう」

そう言いながら自分の手袋を外し渡す。

「ぼっちゃんが言うんだから構わないぜ」とダヴィードが言うと彼女は戸惑いながら、渡された手袋を片方はめた。

「僕のではサイズが合わないか、一回り小さいのを用意してやれ」
「はいはい」

ダヴィードは彼女から手袋を受け取るとローレンに返し、そのまま彼女に指示を出した。

メイドは頭をさげて奥の部屋へ下がり、変わりに制服を着た使用人が現れる。

東館のフットマンである。彼はローレンが考えていた様子と違い、きちんとした服装をしていた。礼をする仕草も扉を開けるタイミングも問題はないように見える。

「フットマンは人前に出たくないって言ってたが、何も問題ないように見えるが」

「作法は問題ないさ。言葉遣いも完璧だぜ」

得意げにダヴィードは言う。ならば何が人前に出たくない理由なのだろうと疑問に思った。

ガシャーンと陶器類の割れる音がし、男性の低い悲鳴が聞こえる。聞こえたのは奥の部屋からだった。ダヴィードが顔を引きつらせて笑う。

「ちよつと待っててくれ、ぼっちゃん」

そして、ローレンに待つように依頼すると音のする部屋に走って行った。待てと言われて大人しく待っているローレンではない、そのまま彼に続こうとするとフットマンに止められた。

「なぜ通してもらえない？」

ローレンの言葉に彼は泣きそうな表情で「ここでお待ちください」と言うだけ。その表情にローレンは大人しく従う事にした。

西館のフットマンは初めて見るローレンに、高圧的な敵意が感じられた。知らない人間が偉そうに指示しているのは、今まで綺麗に守ってきたテリトリーに土足で入り込む様なもので、彼らにしたら何者だと警戒して当たり前なのだろう。だが、こちらはその様な意志は感じられず、逆になぜだか気の毒に感じられる態度をとられた

ため、ローレンは大人しくダヴィードを待つことにした。

「ありがとうございます」

元居た椅子に座ると、彼はお礼を言う。大人しく従ったことに対して礼を言われるのは何かおかしい。

「お前ら、何でもつと慎重に物を扱わないんだ」

「気をつけているのですが。なぜだか」

「なぜだかじゃないだろう。何で真っ先に謝罪がないんだ。結果が証拠だろ」

遠くでダヴィードが誰かを怒鳴りつけているのが聞こえる。聞き耳を立てているわけではないが、向こうの様子が想像できるくらい良く声と音が聞こえるのは、フットマンが扉を閉め忘れたためだろう。

いや、わざと開けっ放しにしてローレンに状況を分かる様にしていたのかもしれない。

そのまま聞いていると、ガシャンとまた別の音がして「ほらダヴィード様だって人の言えないじゃないですか」と笑う声がある。

「暴力ばかり振るうからバチが当たったんですよ」

「うるさい」

柔らかいものを鈍器で殴る音がし、低い男性の悲鳴が一瞬遅れて聞こえてきた。

「あちらに行かなくても、何となく解るが あれはいつもの話なのか」

ローレンと同室で待たされている使用人が首を振る。顔が青ざめている事から態度で否定していても、肯定ととらざるをえない。

まず、フットマンが何か屋敷の物を壊し、説教していたダヴィードが怒りに任せ体罰を行おうとしたら、自分が別の物を破損してフットマン達に笑われている。という様子が、先ほどのやり取りから想像される。おそらく、最後の鈍い音は誰かを殴り付けたのだろう。「確かに、人前には出せないか」

そう言うと、青ざめたフットマンがいれた紅茶を飲んで、この状

況が収まるのを待つことにした。

遠くでは、ダヴィードの声は勿論、他の男性の声も複数聞こえており、その会話内容から直ぐに終わりそうにない。

屋敷のものをアンダー・バトラー自体が壊したとなると責任は誰のものになるのだろうと考え、行き着く先は自分だため息をついた。

昨日、ダヴィード達が破損したものは何かと思い台帳を提示するようローレンは依頼した。ローレンの屋敷にはヴィオロンの付けた調度品台帳があつて、最終的に財産を処分する時に大変重要な物だったのを覚えていた。おそらくこの屋敷にも似た様な物が存在するはずで、無ければヴィオロンならば作成しているだろうとローレンは予測しており台帳が無い想定はしていない。

「まだしっかりと整理ができていないので、あまりお見せしたくないのですが」

ヴィオロンはそういういながら、百科事典ほどの分厚いファイルを数冊、棚から取り出し、積み上げる。

「破損報告書と新規購入報告書はこちらです」

カゴの中に無造作に積み上げられた書類の山が、目を通してないことを表していた。整理ができている云々よりも、元々ローレンの目的は破損物を探そうと思っていたためカゴの中を探せば目的物は早く見つかりそうである。

「どうせなら、この書類も処理してしまうぞ」

台帳に目を通すついでに消し込みをしまえば時間が短縮されると提案する。

「よろしければ」

そういい残してヴィオロンは下がると、残ったローレンは報告書と台帳を照らし合わせるためカゴの中から書類を出す。先ほどのヴィオロンのあの様子なら台帳の正確さも怪しい。書類の整理が終わったら屋敷内を確認する必要があるとローレンは次の作業を決めて、仕事を始めた。

台帳整理は時間のかかる作業だが特に難しいというわけではない。単純な作業だが成果が目に見えて確認できるため仕事をした証拠ができる。物が残る故により正しいものを作成すべきだとローレンは

意気込むのだった。

書類の一番上は破損した陶器の皿で場所は厨房。東館の物ではない。

報告者は『ジル』と署名がしてあった。

昨日、西館で聞いた名前だと手を止めるが、今必要な事柄ではない。調度品名を台帳上に確認すると赤いインクで『破損』と書き記す。

そんな作業が二、三時間余り、探しているダヴィッドや東館の名称は一向に確認出来ず、彼の仕事ぶりが少し伺えた。確かにバカ正直に報告すれば、咎められるだろう。

調度品台帳の東館部分を握りしめ、東館にローレンは向かうのだった。

窓はあるものの位置取りが悪いのか日射しは入らない北側の廊下は日中は誰もいない事が多い。

会ったからといって何かあるわけではないが、人に会いたくないローレンは自然とこの様な場所を選択して歩いている。この屋敷内でなくても同じような道の選択をするのは、もしかしたら人気の無い場所や薄暗いのが好きなかもしれない。

残念な事に、誰も居ないと想定していた廊下の先に女性が立っていることを発見した。制服でないことから、女主人のエリンかその侍女のヴェーラか、それともローレンの知らないお客様か、どちらにせよ気がつかれては面倒だと歩く速度を落とした。急いでいた訳ではないので、女性の歩くスピードに自分が追い付かないように調節したのである。

向こうに見える相手に近づかないように後ろを歩くのは、付け回しているみたいに見えるだろうなあと窓の外を見る。運がよかったのか、当たり前なのか日の当たらない北側の庭には誰も居なかった。「いやあっ」

突然、廊下に響き渡る女性の拒絶の声。窓の外から視線を戻すと、

目の前の女性が男に押し倒されていた。後ろから視角になる位置で隠れていたのだろうか、庭に目線を落とすまで、自分と彼女しか居なかったように思う。

とりあえず救出しなければと走るが、現場までが遠い。

数分前の自分の態度を後悔した。

「なんだ、この服どうなってるんだ？」

焦る男の音がする。躊躇する言葉と同じく、馬乗りになった男は動きを止めていた。女はなぜだか抵抗していない。

もしかして 強姦に襲われているという考えは勘違いなのだろうかと走る足を止めた。

野外ならば可能性は多少あるが、屋敷の中で婦女子に手を出す人間がいるだろうか？

もし強姦ではなくて、只の恋人同士の戯れた遊びなら、自分はどんな出歯亀だと後で散々後悔することになるだろう。

人に出会うというリスクはこのようにしてローレンを苦しめる。

ローレンの苦悩とは的外れで、彼女と男は恋人同士ではなかった。ましてや、知り合いでもない。

彼女は、抵抗すると押さえ込まれる体力が勿体ないとあきらめた様に静かにしてただけだ。相手の抵抗がなくなると、男は事を始めようとするが服の脱がしかたが解らず戸惑ったまま、のしかかっている。

「ホント、犯るんだったら服の脱がし方ぐらい覚えとけよ」

低い声が響くと男は驚き、更に動かなくなる。そんな隙だらけの腹部に彼女は曲げたひざを差し込む、上に馬乗りになっているため男の腹部と言うよりも脇腹に近い。そのままに突き上げた蹴りが腹部に突き刺さるように入ると、その衝撃で男は中に浮き、彼女は自由になった。

その行動わずか数秒。

鮮やかである。

彼女は両肢を上から下へ振り下ろす反動を使い、上半身を起こす

とローレンと目が合った。

女性は侍女のヴェーラだったがローレンには女主人と区別がつかない。

「あ、あらローレン様 見ていらしたの？」

どこから、とは聞かれなかったが彼女の指している内容はなんとなく想像がついたのでうなづいた。

「ちっ だったら助けろよ」と小さくつぶやくと立ち上がる。その冷たい声に耳がおかしくなったのかと疑った。

いや、案外女性などは本性はこんなものかもしれない。

「今のここでの事。姉様にバラしたら、殺しますわよ」

蹴り上げた男が這いながらも逃げ出そうとしている姿を見て、男の襟元をつかみ床に叩きつける。鈍い音と男のうめき声が少し姉様という表現でどちらであるかの判断がやとついた。

「こんな大人しい女の子を狙うなんて、ろくでもない使用人です。

顔はよくても性格はおかしいんじゃないのかしら」

『その言葉そっくりそのままお前だよ』と思ったが黙っておこうと思う。それより、叩きつけられた男は動かない。

「死ん
」

「こんなくらいでありえない」

そう言ってもう一度襟元を掴んでローレンに顔が見えるように起き上がらせる。下半身は床にうつ伏せに寝ている状態のまま上半身のみを持ち上げられているので、無理やりな海老反り体制である。そんな姿が苦しいのか、それとも後ろ襟を掴まれ首が絞まって苦しいいのか男は苦痛の表情で何か言葉を吐き出そうとするが声にならない。『ぐ』とか『あ』などの単語が空気と一緒に鼻から漏れる。

「ほら、息してる」

彼女にすれば、何を言おうとしているかは重要ではない、呼吸をしているから声が出るのだとローレンに知らしめたら問題ないのだ。地面に叩きつけられた顔は、元の形の判断がつかなくなっていて、この男が誰なのか分からない。

制服はフットマン達が着ているものに似ているが、それだって所属の手がかりになるものでもない。

「こいつみたいなのが他にいたら問題じゃない。調べてよ」

怒りの表情で使用人をつまみ上げるヴェーラにローレンは先程悩んだ内容を確認しておきたくて、無礼を承知で訊ねてみた。

「あなたが誘われたので」

言葉を言い終わらない内に石の壁にヴェーラの拳がめり込んだ、ローレンの髪が少し切れ目の前を散る。

彼女の暴力的な行動に驚き恐れるよりも先ほどの状況を読み誤っていた事が残念だった、躊躇せず助ければよかったのだ。

「ああああ。ヴェーラ――！」

悲鳴に近い絶叫が廊下に響く。声の主は彼女の姉で主人のエリンである。

「暴力は振るわないって約束しましたからこちらに連れて来ましたのに、何をしているのです。ローレン様お怪我はありませんでしたか」

なんだ 暴力なのは知っているのか、と先程口止めされた事を思い出す。これでは何を口止めされたかが分からずどこまでを話してよいのやらと一瞬悩む。

「私は何も。ヴェーラ様が、このフットマンに襲われたのを撃退されただけです。ご自身の身を守るためです、お約束を破られたのは仕方なかったのかと」

変に隠すよりもと理解した現状を正直にはなすとエリンは表情を歪めた。屋敷内で婦女暴行未遂があれば、女性なら怖がることだろう。

「屋敷内でこんなことが起こったのは残念ですが、しばらくはお一人でこの廊下を通るのは止めたほうが良いかと」

「遠回りになりますか危ないですからね。姉様」

ヴェーラはエリンの両肩に手を添えて歩きます。

離れていく道中でたまに頷いているが何を話しているのかまでは、

残されたローレンには分からなかった。

彼の新しい仕事は、目の前に転がっている。暴れられても困るの
で、気を失っている男の上着を脱がすと、後ろ手と絡め、軽く拘束
した。

「問題はどうかやって運ぶか」

人間一人を人間一人が移動させるのは簡単なことではない。自分
は世間一般的な男子より力はない事は自覚している。自走させるの
が一番楽な方法なのだが気が付く様子はない。侍女は軽く危害を加
えていたが、衝撃は全く軽くないようだ。

起こしている脳震盪で記憶が曖昧になっていないことを祈りつつ、
男の腹に台帳を置き両足を持って引きずっていった。

「ローレン様どうなさいましたか」

上手い具合にヴィオロンに出くわすと、先程あった内容を簡単に
説明する。説明内容は、ヴェーラの暴力は省略したが壁の破損も含
まれている。

ヴィオロンが数名のフットマンを呼びつけると、男はしっかりと
拘束された。食い込んだ縄が、見えていて痛いぐらい強く縛ってある。
「見たこと無い制服ですね、屋敷の物では無いのかもしれませんが」
「そうなのか　　てつきりその制服は屋敷のフットマンかと思った
のだが」

簡易に拘束していた上着を調べていたヴィオロンがそう言うとき口
ローレンは自分の意見を述べた。

「背は高いし、体格もしっかりしてます。顔は元の原型がわかりま
せんから判断基準には入りませんが、勘違いされるのも仕方ないで
すね。ですが、制服が全く違うのですよ」

ローレンは男の上着を預かり、そこにいるフットマンの制服と比
べるが何が全く違うのか、分からず首を傾げる。

「ここですよ」フットマンは上着のボタンを外し裏地を見せた。

裏地はついているものこそごく一般的なものだが、生地の合わせ
方が普通ではなかった。内ポケットの入り口を避けるように縫い付

けられ、何故か派手な糸でステッチが施されている。

確かにこれを知っていれば、男の上着を比較すると全く別のものと判断するだろうとローレンは納得した。

「こいつは完全な不審者なわけだな」

「ですね。物取りはたまたまに確保しますが、ご婦人が狙われたのは初めてです」

ヴィオロンが表情も変えず屋敷の現状を語るとローレンは驚いた。安全だと思い込んでいた場所が危ないのが普通だと言われれば驚かない者はいない。

「よくいるのか、こんなのが」

平和ぼけした言葉に当然だとばかり、ヴィオロンは答えた。

「街中に群れてある屋敷ではなく、こんな田舎にぼつんとある屋敷ですから、珍しい事は無いでしょう。しかも、王族の屋敷です狙わない方がおかしいですよ」

「警備は何をしている」

「敷地の入り口に数名配置しているだけですし、制服を偽造してまで入ってくるなら対応は無理かと」

実質的に行うとすれば、入るフットマンの上着を脱がし裏地チエックをすれば良い。ただ本当に行うのはナンセンスであり、裏地に何か在りますよと公言しているのと変わらない。

「対処は不可能なのか？」

至極当然な疑問と希望的な質問をヴィオロンになげかける。

「無理ですね。時間をくださればよき案を考えてはみますが」

一度は不可能だと結論付けるが、主人の『なんとかしろ』という意思を感じ取ってヴィオロンは意見を変える。

「そうしてくれ」

「ところでローレン様。東館の台帳を持って何処にお出かけでしたか」

男の上に乘せられていた台帳をローレンに渡す際にそれが自分が先ほど預けた簿冊の一部であることに気が付きヴィオロンは尋ねる。

「ああ。ダヴィードが昨日調度品を破壊したハズなのだが報告書がなくてな」

「東館なら破損報告はありえませんか」

即答である。ローレンが迷いのない言葉に疑問を抱くのは当然だ。「特別に出す必要は無いとかか？」

「いえいえ。物が壊れることがないのですよ。ダヴィードにご確認ください」

『物が壊れることがない』とヴィオロンは言うがそんな訳はない、現に昨日割れた音を聞いている。人の怪我ではないのだから、割れた物は元には戻らない。

ダヴィードが虚偽の報告を行いヴィオロンを騙しているのかと疑うが、彼が騙されるとは思えないためその考えを否定した。

ここで昨日の話をして音だけでは気のせいと捉えかねられない、物証を提示したほうが早いと思う。

だが、目の前の男を放置して東館に向かうつもりもなかった。

「彼の処理は終わってないが」

「これ以上は屋敷の主人の仕事です。私もこれに関してはグラディ―ミル様のお帰りをお待ちするだけですよ」

ここからはローレンの仕事はもうないのだと言葉で表わされると迷う物がなくなり東館へ向かった。

そう、ローレンはこの屋敷の使用人でしかない。

「昨日、壊れた物？ 何の事だ」

東館の監視者は明らかに視線を合わせないようにしているため、何か隠し事をしているようにしか見えない。

「昨日応接室で割れる音を聞いた。だが破損報告はあがっていない」
核心を突いてやろうと続けざまに質問をする。

「壊れてないんだし破損報告はありえないだろ」

「ちょうど台帳整理中だ、管理物件をすべて確認させてもらう」

煙がないのだから、火もあるわけがないと主張するダヴィードに台帳を見せつけ許可を取る。拒絶したとしても強制執行するわけだが、ローレンなりの礼儀である。

「かまわないが、無駄な点検になるぜ」

飾つてある品、保管してある品、使われている品、目視して台帳と照らし合わせる作業。時間は多少食うが躓かなければスムーズに進む作業だ。

予想していた欠損は何もなく、スムーズに作業は終了した。

調度品はすべて台帳通り揃っていた。

何一つ欠損することなくあった、全くの予想外である。

「ほらな、無駄な点検になっただろ」

「無駄な点検はない」

そもそも点検という言葉の意味が理解されていないような嫌みだ。

「全て台帳どおりとなると、昨日の音は一体――」

確かに台帳通りに調度品はあった。未報告の物品の確認も同時に行っていたため隠された物は無いと考えられる。

昨日は偶然にも未報告の物品が破損したのだろうか。

「ぼっちゃんの気のせいだって」

おそらくそう言われて笑われるだろうと予測した台詞をダヴィードは言った。

「お前は予測した通りに動くな」肩を落としてポツリと呟くとダヴィードの肩越しに作業するフットマンが見える。

彼の頬は青く腫れていた。顔がすべての（といっても二言はない）フットマンの顔に青痣が付いているのはどうなのだろう。

「彼の怪我は作業中の事故か、それともお前の知らない事か」

「彼って」

ローレンが指差す先にいるフットマンを見てダヴィードは固まってしまう。きつと彼にとって良くない指摘なのだろう。

「ぎよ　ぎぎょうむ中の事故だ。あいつはどんくさいから顔に鈍器が当たってな。顔が命のフットマンが顔に傷つけたら意味無いもんな。奴も真剣に仕事してるし、傷も多分治るからクビは勘弁してやってくれよ」

そう言ってフットマンから意識を反らそうとローレンの背を押して回れ右。

「別にクビなど考えていない」

ローレンがダヴィードに反論しようとする、ガシャーンと昨日と同じ音がする。青痣のフットマンが壁にかけてあった皿を落としてしまったようだ。

自分達の目の前での破損事件である。これは弁解しようが無い。

「あら、ダヴィード様」

壊してしまった事を焦る訳でもなくのんびりとした口調でダヴィードに声をかける。

音がして振り返ったダヴィードは「お前またやったのか！」と怒鳴りつけた。

ダヴィードは『また』と言った。

「気をつけたつもりなんですけど、まあラベルを呼んできます」

「ああ　ま、までダメだ呼ぶな」

ふりかえればローレンがいる事に気がついたダヴィードは彼の提案を却下する。

「でも、時間が経てば直らないですから」

そう言い残して、ダヴィードが却下しているにも関わらずフットマンは彼方の方に駆けていった。

「どういう事だ？」

「な、何でもありませんよ。割れたと勘違いしてるんじゃないのでしょうか」

先程までと違い下手な棒読みの敬語を話すダヴィードは、誰の目にも隠し事が有るのは明白だった。

二人の目の前の床には割れた皿が散らばっている。

これを割れていないとは言えないだろうと無言でダヴィードを見つめるが、彼は無言のままその皿を見ないようにしていた。

そうこうしている間に先ほどのフットマンが別のフットマンを連れて戻ってきた。彼がラベルなのだろう。

「だからダメだって」

「時間がないんです」

帰ってきたフットマンとダヴィードが言い争う。

普通フットマンは管理されている立場なのだから、ここまで逆らうのは問題なのではないだろうか。その光景を見ていてローレンはふとそう思った。

これからラベルと呼ばれるフットマンが行おうとしている行為は東館の使用人とヴィオロンしか知らない。主人にさえ知られていない隠し事をローレンに知られては問題になるとダヴィードは拒否するが、時間がたてばその行為自体が意味がなくなると理解もしていた。今すぐするか、しないのか、どちらのリスクが大きいか考えだしたら頭の中が整理できなくなる。

自分のフットマン達はそんな考えも気にせずに後者を心配し、先に進めようとしていた。

「ああああ。めんどくせえ。ぼっちゃん他言は無用だぜ、始める」

短い時間に、葛藤がダヴィードの頭をパンクさせる。

「後、動くな」と付け加えると、皿を割ったフットマンの側に歩いていった。

ラベルと呼ばれたフットマンは床に何かで円を書く。幾何学的な模様と何処かの文字らしき模様。その上に割れた皿と破片が並べられる。

「今日は逆だからな」

そう言うたダヴィードは持っているケインで皿を割ったフットマンを殴り付けた。低い男のうめき声と共に口からは血が吐き出される。

少し殴ったぐらいでこんなに出血するだろうかと疑問を抱く量の血液が彼の口から床に落ちると、溝が掘ってあるかのように、まっすぐ細い線で円に向かっていった。

「明日もやったら死にますよ」

「むしろ、死んでこの雑な行動を治せ」

ラベルとダヴィードが話をしている間に破片は元の皿になった。

皿が無事に元に戻るのを見届けると、皿を割ったフットマンは口を抑え、奥に引込む。

ダヴィードが『また』といったことと、ケインで殴りつけて出血したことからおそらく昨日の割れた物もこうやって修繕されたに違いない。明日になれば彼の顔には双方に青い痣ができるのだろう。『ヴィオロンが言っていた意味はこういうことか』

確かにこれならば壊れる事はない。破損報告書も要らなければ、台帳から品が欠損することもない。

「なんだヴィオロン様はぼっちゃんに教えてるのかよ。聞いてるんなら言えよ焦ったじゃねえか」

「お前に聞けと言われただけだ。しかし、これはすごいな」

「ぼっちゃんって動じない人なのか？」

「？」

ダヴィードの言葉の意味がわからないため首を傾げる。

「びつくりするだろう。怪奇だぜ？」

「怪奇なものは初めてじゃない。これは誰の奇跡だ」

動じないの意味が理解できると、目を伏せて思い出すように『奇

跡』と言葉にする。人間には到底達することが出来ない技術は全てローレンには奇跡としか受け取れない。

彼が知っている奇跡は代償に命を削って願いを叶えるものだ。目の前の皿も、誰かが命を削って行っているのなら注意する必要があるだろう。

「奇跡には違いないが、錬金術って呼ばれる魔法だ」

「錬金術は魔法じゃないですよ」

偉そうに答えるダヴィードにラベルが訂正する。

「錬金術といえば、金を作れる技術か」

聞き覚えのある言葉に、昔、文書で読んだことがあると記憶を引っ張り出す。

「金は現実は無理ですが、彼の体液を元に分子を再構築したんですよ」

ラベルはにつこり笑うと割れた皿を元の場所に戻した。

体液は、彼の口から出たもの血液だの唾液だろうと予測はつくが、皿の分子を再構築などと話をしてもしもローレンにはさっぱり理解出来ない。

「言っても理解できねえって」知ってか知らいでか、ダヴィードが偶然にもローレンの心中を代弁する。

「セーヴァ様のご子息にご理解できないなど、失礼ですよダヴィード様」

ラベルは、ダヴィードの言葉に軽く笑うとローレンの父の名を語った。父と自分の事を知っている人間がいる事に正直ローレンは驚いていた。

「ぼっちゃんであの科学者の息子なのか。てっきりどっかの貴族が落ちぶれたのかと思ってたぜ」

「父の名は、そんなにも有名なのか」

兵器開発の科学者の名前を直接の関係者であれば知っているのは仕方ないが、一般市民に見えるフットマンにまで知られているとは予想外だった。良い意味での有名ではないのは間違いないだろう。

「知らない奴は居ないんじゃない？」

知らない奴は居ないという言葉が、心に引っ掛かるが父の罪に関しては何度も聞かされてきた事だ。ダヴィードなど国まで滅ぼされているのだから、彼らが憎むべき存在だと認識しておかしくない。

ここでも咎め立てられるのかとローレンは言葉を失う。

「ん。もしかして俺が逆恨みして知っている　とか思ってない？」

黙ってうつむいてしまったローレンに焦ったように声をかける。

言葉さえ発しないが、反応し顔をあげたのが肯定と判断した。

見上げたローレンの不安な瞳がダヴィード達を見つめる。彼は男なのだから確率は低いが、今にも泣き出してしまいそうな表情がどうしたら良いのだろうと心をざわめつかせる。

下手な言葉はローレンを傷つけやしないかと先程の質問の続きが口に出せない。ヴィオロンに目をかけてもらうには、ここで、溺愛する彼に距離を置かれては困る。

「あの、こんなことを言うのは何て言うか」考えにならない言葉がしどろもどろ。

「セーヴァ様を悪く言うのは無知な輩ばかりです。彼の設計した兵器は人智を越えてるんですよ。もしそれで危害があったとしても、発明者やその家族に怒りの矛先を向けるなどバカとしか思えませんねえダヴィード様！」

上手く言葉に出来ないダヴィードを押し退けるように思いを伝える。最後に振られた言葉にダヴィードは「ああ」と間抜けな返事を返した。

「まあ、今のが正論なんだが。貴族ならお前の父上の名前は知ってて当然なんだよ。こいつも貴族の端くれだし当たり前前の知識かな」

「普通は家族構成も覚えますよ」

「いや、当主だけでよくね？家族全員名前と顔覚えてるなんて、気味が悪いだろ。役にも立たねえし」

「役に立つとかじゃないですよ。貴族のたしなみです。ねえローレン様」

ラベルはダヴィードに話を振るようにローレンにも同意を求める。

「あ　いや僕は必要なかったから生憎」

「ほら、お前がおかしいんだよ」

ローレンの返事が自分の同意になったことでダヴィードはラベルを攻める。

「いや、他者を覚える才能は否定する必要はない。寧ろ今の業務に生かせばいい　と思うが」

「イイコト言うね。ほら仕事しろ！」

まだ何か話をしたそうな表情で動かないラベルを追い払い、ダヴィードは言った。

「ベリラントの奴等が何て言うか知らないけど併合時は百年以上も前だ、セーヴァサマなんて居なかったんだぜ。銃剣でちゃんちゃか闘ってた時代だ。もしその兵器すらばっちゃんの父上が作ったとしても、ラベルが言った通り関係ねえだろ。使った奴や命令した奴なんかの方が本来罪悪感を持つんだよ。だから、なんていうの」

目を閉じて一息吐く。

「気にするな」

これ以上の言葉が見つからなかった。

「一つ質問があるんだが」

なんだ、と口にはしないが表情で問うとローレンは続けた。

「あの皿はあの位置でないとダメなのか？」

質問は別の話と構えていたダヴィードは拍子抜けしてしまう。

「気にしてないなあ」そのまま、にやりと笑うと「お前が気にするなといったんだぞ」とローレンもつられて口角を上げる。

「皿は扉の左に飾られるのがこの屋敷では普通だな。なんか厄よけらしいぞ」

よくは分からないがと続ける。

「位置は変えにくいから 置き方が割れる原因だと思うが？」

よく分からないしきたりを勝手に変更した場合、後々痛い目に合う可能性がある。場所は変更しないで破損予防をすれば、後者の指摘になる。

「確かに、この皿は自殺願望が高いな」

先程のフットマンだけではなく、色んな人物に何度も再構築された経験があるのだろう。ダヴィードは皿を手にとり話しかける。

「いつそ壁に穴でも開けてはめ込むか？」

皿は扉の左側に少し出っ張った部分に置かれていた。皿を支えるのは茶色の縁に打ち込まれた鉄の足二本だけで、右側と左側を均一に保っているからこそ、その位置に収まっている。バランスが崩れれば直ぐに落ちる設計だ。

ダヴィードの言うとおり壁に四角にへこませて、簡易な棚を作るのが破損を防ぐ良策に思える。

「費用が気にはなるが、良い案だと思う」

「まあ。費用でいっちゃうとフットマン一人殴って済むんだから今のままがいい気はするな」

殴れば元に戻るのだから、コスト面ではゼロである。

だが、問題はそこではない。

「ヴィオロン様に相談かな。最終的にはぼっちゃん次第だけど」

まあ考えといてくれやと皿を元の位置に戻して言った。

「そういえば、お前の怪我は？」

昨日の音からして、割れた物は二つである。今のようにして元に戻したならダヴィードも顔に痣があってもおかしくない。

「俺まで破損させたのに気がついてるのか、ちゃんと代償は払ったぜ」

「いや、大丈夫なのかと」

口から出血させるのであれば殴り付けるのが効率的ではあるのだが、横顔からは痣らしきものは見えない。

「心配してくれてるのか、誰にも見せられない部分だけど、見る？」

人懐こい笑顔でローレンに近づくと上着を捲ってそう言った。「見る」と言えば服を脱ぎだしそんな勢いだ。

「いや 遠慮しておこう」

冷や汗を額に浮かべ表情を歪めると、残念そうにダヴィードは上着から手を離れた。

東館の秘密を理解したローレンはとりあえずヴィオロンを探すことにした。

破損報告が上がらないのはいいことだが、あの行為が倫理的にどうだろうと悩むからだ。ある意味処罰に近い事から作業員は気をつける様になる思惑があるかも知れないが、『また』直せば良いと注意散漫になっている様に思えるからだ。

皿という物質に本来与えられていない再生を施すという奇跡は、きつと何らかの形で代償が返ってくる そんな気もしないではない。ダヴィードなら、ちゃんと代償払っていると主張しそうだが。

「また、眉間にシワが寄ってるわよ」

後ろから声がかかる。ふり返るとヴェーラだった。

「真後ろからは見えないと思いますが」

とはいうものの、女主人の言葉を思い出して気持ち眉根のシワを無くそうと試みる。

「通りすぎた時に見たのよ。気づかなかった？」

先程の事もあり、余り関わりたくないかと首を横に振ると立ち去ろうとする。

「あ、まってまって」

方向転換したローレンの進行先を塞ぐようにヴェーラは手を伸ばした。押し退けたり、迂回するのもおかしいので仕方なく立ち止まると「なにか？」と尋ねた。

「えっと ありがとう」

ヴェーラが頭を下げる。

「お礼を言われる様な事はしていませんが」

北の廊下で見かけた時は結果的に見捨てた形になったし、夫人に秘密にすることも出来なかった。怒ったとしても感謝される事象があっただろうか。ローレンは皮肉ではなく素直に疑問に思う。

「ローレン様があー言ってくれなかったら今頃コウクナに戻されてたわ」

「危険だったのは事実なのだし戻ったほうが安全では」

むしろ戻ってくれた方が、お互いに平和に暮らせるだろうかと思いながら彼女の返しをおとなしく待つ。

「まさか、逆に姉様の傍にいなきゃって思ったわ。それとも追い返す？」

「貴女の実在は私の権限で如何こうできるものではない。ただ

」

「ただ？」

一度言葉にしようとして黙ってしまった台詞を促すように繰り返したヴェーラを見てローレンはため息をついた。

「ただ、叶うのなら。あの言葉遣いは僕の前ではやめてくれ」

頭を抱えて言葉を吐き出すローレンに、ヴェーラはにっこり微笑んだ。

「その顔であの暴言は心臓に悪い」

彼女も又、姉姫にそっくりなのだ。

男女関係なく誰もが守りたいと思う可憐な容姿。透き通る綺麗な声は歌姫として有名だった。

「大丈夫そのつもりはないわ」

その同じ声で語るのは、彼女なら絶対言わない言葉。

だから、見た目が同じでも違うと思えるのだろう。

だから、余計な気を使わずに、正直に自分の気持ちを話してしまおうのだろう。

「正直、助けられないのは恥ずかしいと思っていたし。貴女の気分も害してしまった。

それに、エリン様である状況は、きっと誰も間に合わない」

「『あなた』っていうのなんで？執事も侍女も使用人だから敬語はいらないんじゃない」

「貴方はエリン様の妹姫です。それに」

「何？」

「先ほどまで『あなた』も僕相手に丁寧な言葉を、お使いでしたよ」
「だって、ヴラディーミル様のご友人でしょ」

ヴェーラの言葉に顔をひきつらせて「殿下は僕の友達ではない」と拒絶する。

「ふふ。そうなんだ。まあ同じ使用人どおし、硬い言葉は無しで貴方も様も要らないでしょ」

「それは強制なのか」

肩を落として彼女を見ると、大きな笑顔で言った。

「うん。守ってくれないとすっかり暴れちゃうかも」

彼女と彼女は似ていない。

だから、ローレンは表情を歪めていても

その言葉に従うのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851w/>

子連れステュワードの縁由

2011年11月16日03時22分発行